

群 教 七	G10 - 01
	平 26. 254 集
	道 徳

人間としての生き方についての 自覚を深める指導の工夫

— 生き方モデルから学ぶ道徳の時間の教材開発を通して —

特別研修員 浅見 俊之

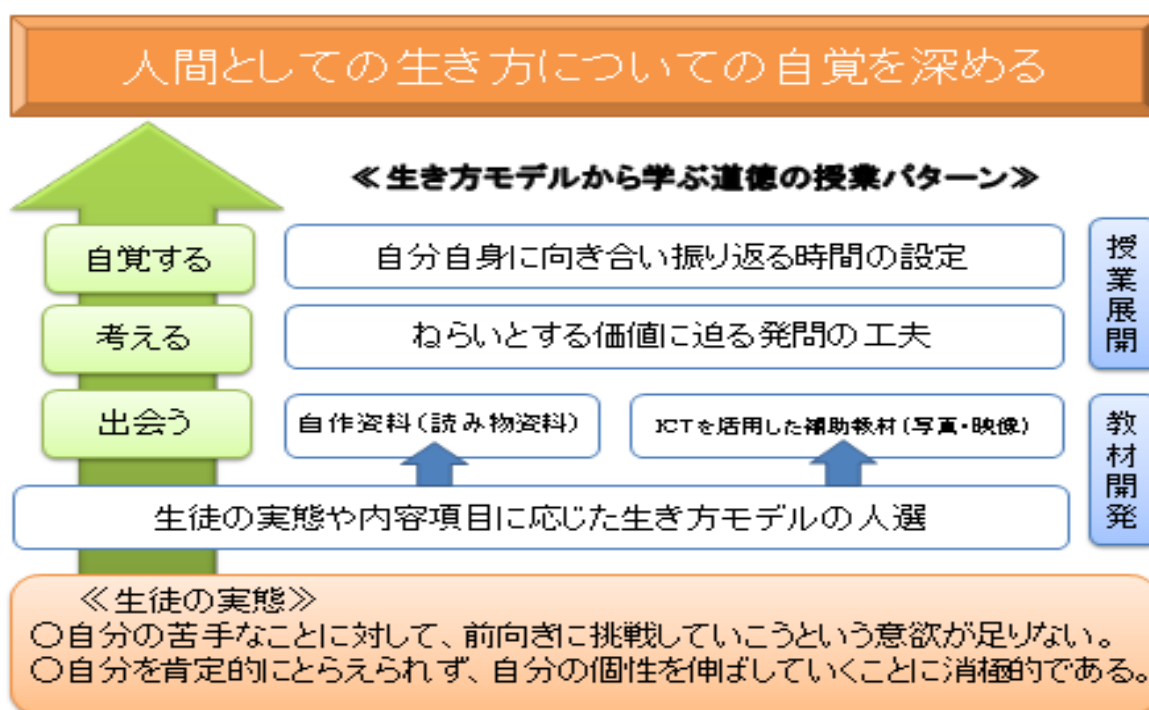
I 研究テーマ設定の理由

中学校学習指導要領では、「中学校における道徳の時間においては、思春期の特質を考慮し、人間としての生き方を見つめさせる指導を充実する観点から、道徳的価値に裏打ちされた人間としての生き方について、自覚を深める指導を重視する」とある。その際、教材の開発や活用に関して「先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、生徒が感動を覚えるような魅力的な教材」と具体的に例示し、多様な教材を生かした創意工夫ある指導を行うことを一層重視すると示している。道徳の教材は、生徒が道徳的価値の自覚を深めていくための手掛かりとして極めて大きな意味をもっている。

そこで、生徒の実態や内容項目に応じて、生き方モデルを選定し、自作資料や ICT を活用した補助教材を作成し、実践していくことを考えた。そして、その人物を支えている心情について考えることが生徒たちの生き方についての問題意識を高め、生徒自らの生き方を見つめ直すことにつながるものと考えた。夢の実現へ向けて地道に努力している人、逆境を乗り越えてたくましく生きる人など、魅力的な生き方のモデルを提示していくことは、思春期の生徒たちにとって大きな影響を与えるものとする。このように、魅力的な生き方モデルとの感動的な出会いを通して、道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深めることができると考え、本主題を設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

(1) ねらいとする内容項目に応じた魅力的な生き方モデルの提示

夢の実現へ向けて地道に努力している人、逆境を乗り越えてたくましく生きる人など、ねらいとする内容項目に応じて、魅力的な生き方モデルを提示していく。その人物の著書から読み物資料を作成し、補助発問や中心発問を考えながら授業を構成していった。

実践1では、元プロ野球選手である桑田真澄選手の著書「心の野球」を基に自作資料を作成した。高校1年生の時のエピソードを基に「表の努力」と「裏の努力」という言葉をキーワードに、授業を実践した。桑田選手の栄光の裏には、表面的な努力はもちろんのこと、人間性を磨くための「裏の努力」があったことが、生徒たちに深い感動を与えた。そして、今までの自分はどうかであったかを振り返ることによって、何事にも前向きに挑戦し、着実に努力していこうという心情を深めることができた。

実践2では、群馬県出身のミュージシャン奥野敦士さんの著書「終わりのない歌」を基に自作資料を作成した。奥野さんは、不慮の事故により頸椎を損傷し、半身不随になってしまう。生きているだけで奇跡と言われた状況の中、諦めることなく、前を向いて挑戦していく奥野さんの力強い生き方が生徒たちに深い感動を与えた。そして、今までの自分を振り返りながら、奥野さんの生き方から感じたことを、奥野さんへ送る手紙として書いた。生徒たちは自分自身に真剣に向き合うことによって、自分の個性をさらに伸ばし、充実した生き方を追求していこうとする心情を深めることができた。

(2) ICTを活用した補助教材を使用した授業展開の工夫

プレゼンテーションソフトを用い、選定した生き方モデルの人物像の理解を補助する教材を作成した。導入において、写真や映像などを効果的に活用することで、その人物に対する関心を高め、その生き方に興味を持つようになり、授業をスムーズに展開することができた。実践2では、奥野さんが実際に歌う映像を通して、生徒たちにより深い感動を味わわせることができた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 生き方モデルから学ぶ道徳の授業というパターンが確立し、魅力的な生き方モデルを提示することで生徒たちの心を掴み、そのエピソードを通して、人物の心情や行動を考えさせていくという流れは、道徳の授業に対する関心を高めるとともに、生き方に対する自覚を深めることに効果的であった。
- ICTを活用した補助教材を用いることで、その人物像の理解を助けることができた。また、写真や映像をスムーズに提示することで、その人物の心情を考えるのに大きな役割を果たすことができた。
- 今までの自分を振り返らせながら、その人物から学んだことや感じたことを書くことは、道徳的価値の自覚化に有効であった。また、その感想をモデルとなった人物へ送る手紙として書かせたことによって、更に自分自身と真剣に向き合うことができた。

2 課題

- ねらいとする価値に迫る中心発問や補助発問、また、道徳的価値の自覚をさらに深めるための切り返しの発問など、発問の仕方をさらに工夫していくことが大切である。
- 生き方モデルから学ぶ道徳の時間を、年間指導計画の中にどのように位置づけていくか、また、他の学校行事とどのように関連させていくのか検討していく必要がある。

3 提言

- ねらいとする内容項目に応じた生き方モデルの選定を継続的に行い、教材開発を進めながら、道徳の時間の資料の共有化を図っていくことが大切である。

<授業実践>

実践 1

- 1 主題名 人間性を磨く 内容項目 1— (2) (第1学年・1学期)
資料名 「心の野球」 幻冬舎：自作資料

2 資料及び本時について

本時の自作資料は、元プロ野球選手である桑田真澄選手の高校時代のエピソードを基に作成した読み物資料のことである。桑田選手の「表の努力」と「裏の努力」という言葉を紹介し、桑田選手の栄光の裏には、表面的な努力はもちろんのこと、人間性を磨くための「裏の努力」があったことを取り上げる。そして、桑田選手が「どのような思い」でそのような行動をとったのかを考えさせることで、桑田選手の心情に迫り、どんな困難にも負けず、前向きに挑戦し、着実に努力していこうとする心情を養っていきたいと考えた。

生き方モデルから学ぶ道徳授業 自作資料『心の野球』（桑田真澄）

○ 自作資料の内容

本資料は、元プロ野球選手である桑田真澄選手の著書「心の野球」を基に作成した自作資料である。桑田選手は高校時代1年生からエースとして活躍し、5大会連続となる甲子園出場を果たし、2度の優勝、2度の準優勝に輝き、甲子園通算20勝の偉業を成し遂げた。その後、ドラフト1位で巨人に入団。巨人のエースとして長きに渡り活躍した。巨人を退団後にはメジャーリーグにも挑戦。チャレンジ精神に満ちた桑田選手の生き方は、中学生にとって魅力的な生き方モデルになるであろうと考えた。

その中でも、高校1年生の時のエピソードを紹介しながら、「表の努力」と「裏の努力」という言葉をキーワードにして授業を展開した。「表の努力」というのは、ランニングをしたり、ピッチングをしたり、要するに、技術や体力をつける練習のことである。「裏の努力」というのは、トイレ掃除だったり、草むしりだったり、挨拶や返事、ゴミが落ちていたら拾うということである。要するに、人の見えないところで善い行いをするということである。桑田選手の栄光の裏には、表面的な努力はもちろんのこと、人間性を磨くための「裏の努力」があったことが、生徒たちに深い感動をあたえるものと考えた。

桑田選手の高校時代

5大会連続 甲子園出場
1年生(夏) 優勝
2年生(春) 準優勝 (夏) 準優勝
3年生(春) ベスト4 (夏) 優勝
甲子園通算20勝は最多勝利

図1 桑田選手の高校時代の経歴

3 授業の実際

【出会う】ICTを活用した補助教材を使用した授業展開の工夫

この人は、だれ？

- ①1968年4月1日生
- ②現在46歳
- ③大阪府出身
- ④元プロ野球選手

図2 補助教材

導入の場面において、図2のようなICTを活用した補助教材を用いることとした。そうすることで、生徒たちの興味・関心を高めることができた。その後、事前アンケートの結果を提示したり、授業で取り上げる人物が誰なのかを考えるクイズを取り入れたりした。

本時に取り上げる人物がどんな人なのか、また、どんな生き方をしてきたのかを考えさせる際、効果的に補助教材を活用することで、その人物像の理解を助けることができたと考えた。

【考える】ねらいとする価値に迫る発問の工夫

発問 ○ 高校入学後、周りとの実力差を感じた桑田選手はその後「何をした」と思いますか。

S 1 : あきらめずに努力を続けた。

S 2 : 球拾いを一生懸命に取り組んだ。

S 3 : 人の見ていないところで努力した。

桑田選手が挫折した経験を通して、人間としての弱さに共感させた上で、本時における中心発問へと繋げていった。



中心発問 ◎ 桑田選手は、野球には関係のない「裏の努力」をなぜ続けたのでしょうか。

S 1 : 運を良くするため。

S 2 : 気持ち（メンタル）を強くするため。

S 3 : 自分の心や人間性を磨くため。

机間指導を通して、一人一人の意見を確認し、意図的な指名を行いながら、ねらいとする価値へ方向付けを行った。生徒は、意見を共有することによって、深く考え、ねらいとする価値に迫ることができた。



図3 発問の場面

【自覚する】自分自身に向き合い振り返る時間の設定

○ 自分を振り返りながら、桑田選手の生き方を通して、生徒の書いた感想は、以下の通りである。

- まだ1年生だけど、先輩に認められるような選手になれるように「表の努力」や「裏の努力」をしていきたい。道具の整理や感謝の気持ちを忘れないで野球をしていきたい。
- 人並み以上の努力と我慢を続けることで一流の選手になれると思った。自分にも夢があるので、そのためには人並み以上の努力をして、最後には夢を果たせるようになりたい。
- 嫌なことがあったりすると、すぐにあきらめてしまう自分を変えていきたいと思った。
- 努力をする分だけ、結果で返ってくると感じた。嫌になっても諦めないで最後までがんばることが大事だと思った。
- 誰にも気付かれないで、陰で努力をしたいと思った。心を磨き、心がきれいな人になりたい。
- 最後まであきらめずに頑張れば、必ず報われる。「裏の努力」をすることで、心も磨かれる。今の自分の悩みも、ゴミ拾いや靴の整頓をすることで、何か発展してくるかもしれないと思った。

道徳的心情や実践意欲が高まるような感想を、学級通信を通して紹介し、共有を図ることができた。

4 考察

- 魅力的な生き方モデルを題材として、ICTを活用した補助教材を用いることで、生徒たちの興味・関心を高めるとともに、生き方に対する自覚を深めることができた。
- ねらいとする価値に迫る中心発問、補助発問、切り返しの発問など、発問の内容や仕方をさらに工夫していくことが必要である。

実践2

1 主題名 自分らしく生きる 内容項目1—(5)(第1学年・2学期)

資料名 「終わりのない歌」 双葉社：自作資料

2 資料及び本時について

本時の自作資料は、群馬県前橋市出身のミュージシャンである奥野敦士さんの感動的な復活劇を基に作成した読み物資料である。

不慮の事故により頸椎を損傷し、半身不随になってしまった奥野さんが、絶望的な状況であるにもかかわらず、堂々と前向きに生きていく、その力強い生き方を取り上げている。どんな逆境にも決して諦めることなく、自分の目標に向かって挑戦していく姿は、中学生にとって魅力的な生き方モデルになると考えた。この感動的な出会いを通して、充実した生き方についての自覚を深め、自分自身のよさや個性を見出すことができるようにしていきたいと考えた。

生き方モデルから学ぶ道徳授業 自作資料『終わりのない歌』（奥野敦士）

○ 自作資料の内容

本資料は、群馬県前橋市出身のミュージシャンである奥野敦士さんの著書「終わりのない歌」を基に作成した自作資料である。

奥野さんは、ロックバンド「ローグ」のボーカリストとして活躍した。バンド解散後、ソロデビュー。ミュージシャン、俳優だけでなく、映画音楽制作など活動の場を広げる。しかし2008年、不慮の事故により頸椎を損傷し、半身不随の身になってしまう。絶望に満ちた生活へと変わり、生きていくだけで奇跡と言われ、もうステージで走ったり、踊ったりすることもできず、ギターも一生弾けないという絶望的な状況の中「もう一度みんなの前で歌いたい」と前向きに生きていく奥野さんの力強い生き方が描かれている。

どんな逆境にも決して諦めることなく、自分の目標に向かって挑戦していく姿は、中学生にとって魅力的な生き方モデルになると考えた。奥野さんの生き方との感動的な出会いを通して、充実した生き方についての自覚を深め、自分自身のよさや個性を見だしていくことができるようにした。

奥野敦士さん

- ①前橋市出身
- ②ロックバンド「ローグ」結成
- ③ソロデビュー
- ④俳優としても活躍

図4 奥野敦士さんの経歴

3 授業の実際

【出会う】ICTを活用した補助教材を使用した授業展開の工夫

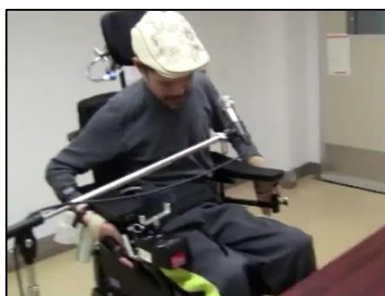


図5 奥野さんが歌う様子

導入の場面において、ICTを活用した補助教材を用いることで、生徒たちの興味・関心を高めることができた。

特に、読み物資料に出てくる、奥野さんがリハビリを重ねて歌えるようになった場面を、図5のように、実際の映像を通して伝えるようにした。そのことにより、生徒たちにより深い感動を味わわせることができた。生徒たちは、奥野さんの力強い歌声を聞くだけでなく、その必死に歌う姿を見ることによって、次の中心発問に対して、より真剣に考えようとすることができた。

【考える】ねらいとする価値に迫る発問の工夫

発問 ○ 奥野さんが半身不随の身となって辛かったことは何だと思いますか。

S 1：好きなことができなくなってしまった。

S 2：もう一人だけでは生きていけなくなった。

S 3：死にたくても死ぬことさえできなくなってしまった。

奥野さんが絶望的な困難に直面した時の経験を通して、人間としての弱さに共感させた上で、読み物資料の後半を読み、実際の映像を見せて、次の中心発問に繋げた。

中心発問 ◎奥野さんにとって「歌（歌うこと）」とは、何だと思いますか。

S 1：生きていくための希望。自分の支えとなるもの。

S 2：自分が一生懸命になれるもの。

S 3：気持ちが明るく前向きになれるもの。

S 4：自分らしさを発揮できるもの。自分らしく輝けるもの。

机間指導を通して一人一人の意見を確認し、意図的な指名を行いながらねらいとする価値へ方向付けを行った。多様な意見を共有することにより、ねらいとする価値に迫ることができた。

【自覚する】自分自身に向き合い振り返る時間の設定

○ 奥野さんへ送る「手紙」として生徒が書いたものは、以下の通りである。

- 奥野さんにとって「歌」というものは「生きる希望」を作り出したものだと思う。体が動かなくなっても、前向きに生きる奥野さんは、とても素晴らしい。もしも、自分に辛いことがあっても、奥野さんみたいに前を向いて、堂々と生きていきたい。
- 今をしっかりと生きようと思った。私は何も不自由なく、毎日を過ごしているけど、世界には不自由な生活を送っている人がいるのだと思ったので、これからは、毎日を大切にしようと思った。
- 自分らしさとは、どんなに辛くて苦しくても自分らしさを大切にしていこうということ。困難の後には必ず幸せが来ると思った。でも、ただ幸せな人生を送っているだけだと、自分らしさが出せないと思う。だから私は、困難があっても、奥野さんみたいに乗り越えて、自分らしく生きていきたいと強く思った。

今回の感想文を奥野さん本人へ送ることを伝えて、真剣に自分自身に向き合えるようにした。生徒たちの表情に真剣さが増し、集中して感想を書く様子が見られた。生徒たちの書いた感想文を文集にまとめ奥野さん本人へ手渡すことができた。奥野さんは「俺のことを授業にしてくれるなんて」と照れ笑い。生徒たちの手紙を見ると「涙が出てきそうだ」と目を潤ませていた。そのことを生徒たちに伝え、さらに深い感動へと繋げることができた。



図6 奥野さんへの手紙

4 考察

- ICTを活用した補助教材を用いて、実際の映像で奥野さんの必死に歌う姿を見ることによって、次の中心発問に対して、より真剣に考えることができた。
- 授業の感想文を奥野さん本人へ送る手紙として書かせることによって、真剣に自分自身に向き合える場面を設定することができた。